

ケーララ州のヒンドゥー寺院司祭・タントリ

—— その職務と家系，ヴェーダ伝承との関わり ——

手 嶋 英 貴*

はじめに

インド亜大陸の最南端西側に位置するケーララ州（「図1」参照）は、インドの中でもとくに古い文化がよく残っている地域であるといわれる。そこでは、カタカリなどの伝統舞踊、医術アーユル・ヴェーダが今なお人々の生活に根付いている。また2500年以上前に成立した宗教聖典「ヴェーダ」と、それに基づくヴェーダ祭祀が生きた形で伝承されていることでも知られる¹⁾。

州内の宗教人口で多数派を形成するヒンドゥー教徒²⁾の信仰・儀礼に関して言えば、汎インド的な要素とケーララ独自の要素とが多くの面で混在している。例えば、インド全体の傾向と同じくシヴァン（＝シヴァ）やヴィシュヌ、ラーマン（＝ラーマ）などヒンドゥーの主要な神々が信仰を集める一方で、ケーララ西部のシャバリマラに聖地を擁するアイヤツパン神、あるいは家々の敷地にしばしばその神祠が見られる蛇神（ナーガ/パーンプ）など、ケーララ州とその周辺に固有の神々が崇拝されている。さらに寺院での儀礼に目を向けると、この地域に特徴的な要素は随所に見られる。後述するようにその範囲は、儀礼内容やその元になっている儀軌文献、さらには儀礼執行の人的組織にまで及んでいる。

本稿では、こうしたケーララ州のヒンドゥー教が持つ諸特徴のうち、とくに「タントリ」と呼ばれる高位の司祭を取りあげる。ケーララ州の寺院儀礼、とりわけ各種の大祭を執行するためにはタントリの参画が不可欠とされている。その存在はケーララ独自の宗教文化を形成する重要なファクターの一つとあってよいが、これに焦点を当てた研究は今まで現れていない。ただしケーララ州のブラーマン、とりわけその最上位を占め、かつて地主階級として権力を有したナンブーディリについては幾つもの先行研究があり、その中でタントリに言及するケースも

* てしま ひでき 京都文教大学総合社会学部教授、京都大学人文科学研究所非常勤講師



図1 調査地域の地図

見られる。以下では、それら先行研究を二つのグループに分け、代表的な論考を簡単に紹介した上で、本稿の位置づけを明確にしておく。

[主な先行研究]

第一のグループは、主に現地調査に基づいてケーララの社会制度・慣習等を論じた諸研究である。たとえば Miller [1954] は、マラバールおよびコチ地域におけるカースト間の関係およびその変遷を考察する中で、ナンブーディリが占めてきた役割を、宗教、政治、経済の諸側面から明らかにしている。Mencher [1966] は、同様に幅広い視野を持ちながらナンブーディリ・カーストに焦点を当て、イギリス統治期以降の社会変動により同カーストが被った影響を論じている。なお、インド研究者の間では早くから、ナーヤル・カーストの母系制合同家族に関心が注がれてきた。それは「サンバングム」と呼ばれる、ナンブーディリ男性とナーヤル女性の間における妻問い婚の慣習と密接な関わりを持っていた³⁾。母系制のそうした側面への関心から、Mencher & Goldberg [1967] は特にナンブーディリの家族制度を取りあげ詳述している。ケーララ中部パーニヤール村（トリシュール県タラピリ郡）を調査対象とした Parpola, M. [2000] は、それまでの研究で看過されがちであったヴェーダ伝承者としてのナンブーディリの一面を対象に含む、多角的な事例分析を提供している。また藤井 [2012] では、2000年代に入ってナンブーディリ社会に生じた「ヴェーダ祭式復興」の動きが、その文化的ないし社会的背景とともに報告されている⁴⁾。

第二のグループは、主に文献情報をベースとしてナンブーディリ社会の変遷を論じる歴史研究である。Narayanan & Veluthat [1983] は、金石資料の情報をも取り入れつつ、古代から近代に至るナンブーディリ社会の変遷史を概説している（Parpola, M. [2000: 9-33] にも同様の目的による概説が付されている）。小林 [1992] は、中世以来ケーララ地域で続いた「統一王権の不在」という状況が、ナンブーディリに汎ケーララ的な権威者としての役割を要請し、宗教と世俗の両領域でその立場を強化したという視点を示す。また、近代以降の動きのうち、ナンブーディリの内部から興った社会改革のあり様を、法制度の変遷史および新聞・文芸作品等の記述とともに明らかにしたものとして栗屋 [1995] がある。18世紀半ば以降にトラヴァンコールで発展した国家儀礼を扱った川島 [1996] においても、主題に関わる範囲でタントリ職に相当する主席司祭（アーチャーリヤ）の役割が述べられている。さらに、未公開の博士論文ながら Ajithan [2014] はケーララ州のタントラ儀礼を初めて総合的に論じたものであり、儀礼執行者としてのタントリに關説する項目を含んでいる。

[本稿の位置づけ]

上に挙げた先行研究では、ケーララの社会・文化を構成する一要素として、ナンブーディ

リ・カーストを総体的に捉えたものが大半であり、本稿が主題とするタントリへの言及は少ない⁵⁾。目下、タントリについて知るための資料としては藤井 [2012: 281f.] および Ajithan [2014: 110f.] という、ともに二ページほどのコンパクトな解説が存在するのみである。

こうした状況を踏まえ、本稿ではまず、先行研究の成果および現地調査から得られた情報に基づき、タントリの具体像を知るための情報を多面から提示する。第1章においてはケーララ州におけるヒンドゥー寺院組織の概要を示し、そこでのタントリの職務、およびそれをめぐる社会環境の変化を述べる。また第2章ではタントリの家系と、彼らが依って立つ儀礼伝承の在り方を紹介する。

次に第3章では、従来研究に欠けていたタントリ当事者の事例研究を提示したい。本稿では特に、タントリの家系がヴェーダ伝承の家系と重複する事例を取り上げる。その歴史を辿ることによって、「タントラ」と「ヴェーダ」というケーララを象徴する二つの宗教伝統が、とりわけナンブーディリ社会の中でどう関わり合っているかを考察する手がかりを得たいと考える。

1. 寺院の運営組織とタントリの職務

ヒンドゥー教の儀礼は、その基礎にある教義を含めてタントラ (*tantra*-) と呼ばれる。それに所有を意味する接尾辞-in を付した語が、サンスクリット語のタントリン (*tantrin*-) であり、「タントラを司る者」といった意味に理解される。「タントリ」(*tantri*) は、サンスクリットのタントリンに由来するマラーヤラム語(ケーララ州の地方語)の語彙であるが、ケーララでは一般的に、寺院の大祭において主導者となる特定の司祭を指す語として用いられている (cf. Ajithan 2014: 110f.)。本節では、ヒンドゥー寺院の人的組織、および寺院の活動全体を見渡し、その中でタントリが果たす役割や彼らを取り巻く社会的状況を述べていく。

1.1 ヒンドゥー寺院の祭事とタントリ

ヒンドゥー寺院の祭事は、大きく日常祭事と大祭とに分けられる⁶⁾。

日常祭事では通常、早朝4時すぎの開門から11時頃の閉門までを一区切りとして、沐浴やプージャーを中心とする朝の諸祭事が行われる。その後、17時頃に再び開門し、献灯とプージャーを中心とする晩の諸祭事を行ってから20時頃の閉門をもって一日のスケジュールを終える。これら日々の祭事は、もっぱらプージャーリ(あるいはプージャーリー)と呼ばれる祭官が行う。プージャーリは、寺院の所有者ないし運営団体によって任命される、いわば雇われ祭官である。特定の家系やカーストに限定される職ではなく、かつては比較的下位のブラーマンがそれに就くことが多かったようである (cf. 藤井 2012: 280-283, Parpola, M. 2000: 148)。

大祭の例としては、ほぼ全ての寺院が毎年10月に行うナヴァラートリ (*navarātri*, 九夜祭)

が挙げられるが、このほかに個別の寺院で年ごとの開催を習いとしている祭が少なくない。年次祭以外では、12年ごとに行われる11日間の祭ナヴィーカラナム（navikaranam, 神力更新祭）がある⁷⁾。神像の霊力は時間とともに衰微して行くため、この祭によってその霊力を12年おきに更新するのである（ただし近代以降は、財政難等の事情により、長年それを行っていない寺院もあるという）。これら定期的なもののほか、新たな神像の造立に伴って行われる開眼儀礼など、非定期的な大祭も存在する。

こうした寺院の諸祭事のうち、タントリが参画するのはもっぱら大祭に限られる。そして、日常祭事を行うプージャーリが低位の祭官と見なされるのに対し、タントリは「寺院の父」あるいは「神格の父」などと呼ばれ、高い権威を認められる。なぜなら、ケーララでは寺院の開創や神像の開眼、そして上に述べた神像の霊力更新も、特別な力を保持するタントリの関与によってはじめて可能とされているからである。それゆえ、ケーララでは、伝統的に全てのヒन्दゥー寺院が大祭を開催するごとにタントリを招請してきた。またタントリは、各寺院が古くから関係を持つ特定の家系から招くことが通例となっている。タントリの側から見れば、特定の寺院における大祭執行の職権を世襲している、ということになる。いわば日本の仏教寺院が特定の家（檀家）における葬儀や年忌法要、盂蘭盆会の執行権を習慣的に保持しているのと同様な状況がそこにあるといえよう。

1.2 ヒन्दゥー寺院の運営組織

タントリとプージャーリのほかヒन्दゥー寺院の運営には、寺院所有者、運営団体、そしてパリカルミヤサダサンといった諸祭官が関わっている。ここでは各々の役割と、彼らを取り巻く社会状況の変化について簡単に触れておく。

[ウーラーラン（寺院所有者）]

まず、寺院所有者はウーラーラン（ūrālan）と呼ばれる⁸⁾。タントリとは違って、特定の家系やカーストに資格が限定されるものではない。ほとんどの寺院では単独の家がこれを務めるが、比較的大きな寺院では複数の家が合同でウーラーラン職を担うこともある。かつては、地主階級であったナンブーディリ・ブラーマンの家（マナあるいはイッラムともいう）や、士族階級であるナーヤルの富裕な家（タラヴァード）がウーラーランとなることが多かった。

しかしこの状況は、西暦1936年に旧トラヴァンコール藩王国で施行された Temple Entry Programme（Kṣētrapravēśana Programme）を起点とする全カーストへの寺院開放が進むにつれ変容していった。寺院開放以前には、低位カーストの人々が参詣できる寺院は限られ、とりわけブラーマンやナーヤルといった上位カーストが所有しているような寺院からは厳しく排除されていた。ところが寺院開放により全てのカーストにあらゆる寺院への参詣が認められると、

下位カーストとの接触を忌避したウーラーラン（とりわけナンブーディリのそれ）が、自らその地位を放棄するケースが相次いだ⁹⁾。

そして20世紀前半から進展した分割相続権の法制化¹⁰⁾、さらに1957年に実施された土地改革（Land Reform）により、それまで地主階級であった家の多くが、寺院を維持しうるだけの経済的基盤を失った¹¹⁾。そうした流れの中で、多くの寺院ではその所有権が、各種の寺院所有団体に委譲されることになった。典型的な委譲先は、ケーララ州政府管轄下にある寺院管理局（Dēvasvaṃ Board）¹²⁾、そしてNSS（Nair Service Society、ナーヤル・カーストの団体）、SNDP（Śrī Nārāyaṇa Dharma Paripālana、イーラーワール・カーストの団体）などであった（cf. 小林 2006: 278-280）。なおこうした寺院所有をめぐる状況変化は、次節で述べるように、寺院におけるタントリの権益喪失にも繋がっていくこととなる。

[寺院運営団体]

寺院運営団体（samiti / temple trust）¹³⁾は、周辺住民たちによって組織されるもので、実際の寺院運営において大きな役割を果たしている。敷地内の施設維持や大祭の実施にあたっては、近隣の人々による寄付や奉仕活動を得ることが不可欠である。したがって彼らを成員とする運営団体、とくにそこから定期的に選任される寺院運営委員会（pariṣad あるいは samghaṭanam / temple committee）は、実務面での意思決定においてウーラーランに劣らない影響力を持つ。ウーラーランが遠方に住んでいて寺院の仕事にあまり関わらない場合は、寺院運営委員会が実質的に寺院の事業全般を取り仕切ることになる。さらに近年多く見られるケースとして、特定の個人やカースト団体を所有者としない寺院では、しばしばこの運営団体が寺院所有権を持つ¹⁴⁾。

[パリカルミとサダスヤン]

大祭の執行に携わる祭官にパリカルミ（parikarmi）と呼ばれる者がいる。この語はサンスクリットのパリカルミン（*parikarmin-*、周囲で働く者）に由来し、ヴェーダ祭式用語では主要祭官の助手を指す。同様に、ケーララの寺院儀礼においては、タントリの周りにいて補助を行う祭官たちの名称となっている。プージャーやホーマの実行を補佐するとともに、マントラの朗読も行う。

パリカルミたちのリーダーを、とくにサダスヤン（sadasyan）と呼んで他と区別する。この語の元になっているサンスクリットのサダスヤ（*sadasya-*）は、大規模なヴェーダ祭式の一つソーマ祭における祭官小屋「サダス」（*sadas-*）から派生しており、祭事の進行を監視する祭官の名称となっている。ヒンドゥー寺院におけるサダスヤンも祭事全体の統括を任務としており、儀礼の実務やマントラに精通した一種の専門職と見なされている（cf. Ajithan 2014: 111f.）。

伝統的には、パリカルミおよびサダスヤンの仕事はブラーマンたちが担ってきた。ただし両者の職権は、タントリのそれとは違い、特定の家系に限定されるものではない。つまり、職務上必要な知識と能力を身に付けた者であれば、所属する家系にかかわらずパリカルミやサダスヤンとして働くチャンスが得られるのである。こうした事情から、1972年にはエラナークラム県アールヴァ市に、タントラの知識と技能を教授する寄宿学校タント



写真1 寄宿制学校「タントラ・ヴィディヤー・ピータム」(アールヴァ市)

ラ・ヴィディヤー・ピータム (Tantra Vidya Pittham, 「写真1」) が設立された¹⁵⁾。この学校は六年間の本科、および本科修了生が追加的に一年間学ぶことの出来る上級科からなる。一年に十人だけ入学者を受け入れ、卒業のためには厳しい試験をクリアしなければならないという。

2015年の取材時点で、そこに学ぶ生徒たちは全員、タントリではないナンバーディリの家の出身者であった。彼らは卒業後、世襲職であるタントリではなく、むしろ有給専門職であるサダスヤンとして登録されることを目指しているという。また、学校関係者ではないナンバーディリのインフォーマントによれば、この学校でタントラの専門知識を得た若者は、自身および出身家系の名声を高めることも出来るという。

1.3 タントリをめぐる社会環境の変化

先に述べたように、各寺院におけるタントリの職権は慣習的なものであり、近代的な社会制度の改革によって直接に変更を迫られるものではなかった。しかし近代史において、タントリ家系は社会の変化にともない、寺院での既得権を様々な形で失ってきた。

最初の契機は、前節でも触れた寺院開放の制度化である。格別の神聖さを自任するタントリたちの間でも、下位カーストとの接触を忌避し、自らの浄性を守るために職権を返上する動きが生じた¹⁶⁾。また地主階級の衰退も大きな影響を及ぼした。分割相続の法制化や土地改革によって、寺院のパトロンとなりうる富裕層が減り、タントリの活動機会である大祭そのものが以前ほど多く行われなくなった。さらには、先述したように寺院の所有権が特定のカースト団体に移った場合には、それを境にブラーマンのタントリを招くことをやめるケースも生じた。そうした寺院では、しばしば当該カースト出身の祭官に「タントリ役」をさせて大祭を行っているという (cf. 小林 2002: 83, 2006: 278-280)。

このように、ケーララ社会の近代化とともに、タントリたちは寺院での職権を漸次に失いつつあったが、1990年代以降になると政府の経済解放政策にともなって景気が上向き、新規の

富裕層ないし中間層による寺院への寄付が増えてきた。近年は、長らく途絶えていた大祭の復興や、新たな寺院の建立などがあり、タントリ職の衰退傾向もいくらか緩和されているようである。

ところで、上に述べたような状況の変化に関わらず、元から数多くの寺院に職権を持っていた一部の有力タントリ家系は、現在まで大きな勢力を維持している。また、こうしたタントリはその経済力ゆえに、寺院所有者としての顔も持っていることが多い。例えば、後に事例研究の対象として取り上げるネドゥムピリ・タラナネルール家は、今でもケーララ州全体（一部はタミルナドゥ州）の約 150 の寺院でタントリを務める一方で、「表 1」に示したとおり 17 もの寺院を所有してきた。ちなみに近年、二つの寺院（「表 1」の 9 および 10）の所有権をカーヴァナート・アーマルールという家に委譲しているが、この家も約 50 の寺院でタントリを務める

表 1 ネドゥムピリ・タラナネルール家の所有寺院（近年他家に委譲したものも含む）

	寺院名	所在地	備 考
1	パーヤンマル・シャトルグナスヴァーミ寺院	トリシュール県ムクンダプラム郡 ブーマンガラム地区	
2	シヴァ寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ 市近郊トリターニ地区	
3	ヴィシヌス寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ 市近郊キルターニ地区	
4	バガヴァティー寺院		
5	スブラフマニヤ寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ 市近郊チェンマンガ地区	
6	マハーヴィシヌス寺院		
7	シュリークリシュナ寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ 市近郊ターンニシェーリ地区	ヴァードウーラ派ヴェーダ祭式準備のための修練地
8	シュリークリシュナ寺院	トリシュール県タラピリ郡ヴァダク ンチェーリ市	
9	シュリークリシュナ寺院	イドゥキ県トードプラ市	2010 年頃カーヴァナート・アー マルール家へ所有権委譲
10	エーラールル・ダルマシャース ター寺院		
11	シュリークリシュナ寺院	エラナークラム県アールヴァ郡カブ ラシェーリ地区	
12	シュリークリシュナ寺院	エラナークラム県アールヴァ郡ヴィ ダーカラ地区	
13	キーラーヴール・ダルマシャ スター寺院	ティルヴァナンダプラム県ティルヴァ ナンダプラム郡カラクタータム地区	
14	ケーシャヴァンプトゥール・ ガナパティ寺院	タミルナドゥ州ナーガルコーイル市 近郊アラキヤバーンディプラム地区	
15	シヴァ寺院	タミルナドゥ州マールターンダム 市近郊ティクドゥッチ地区	
16	ラーマン・コーヴィル	タミルナドゥ州マールターンダム 市近郊	シヴァとパールヴァティーを祀る
17	パッタナープラム・シュリー パドマナーバスヴァーミ寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ 市近郊ターンニシェーリ地区	トラヴァンコール王室の守護神寺 院（表 2 の「1」）のレプリカとし て創建。ネドゥムピリを含む四つ のタラナネルール家系が共同で所 有。

有力家系である。

こうした事実からは、ブラーマン社会において、タントリ職権の有無ないし多寡が家の経済力を左右する一条件となっていることが窺える。また、近代における寺院開放の流れにどう対応したかも、その後の経済事情にいくらか関わりがあるだろう。ネドゥムピリ・トラナネルール家での聞き取りによれば、トラヴァンコールで寺院開放が実施された際、



写真2 スブラフマニヤ寺院（「表1」の5）

同家の人々はこれに反対せず受容的な姿勢をとったという。そしてこの時、旧来の慣習（下位カーストとの接触の忌避など）にこだわって寺院のタントリ職権を手放すような選択をしなかったことが、今に至るまで多くの所有寺院を維持し得た一因であると推察される。

2. タントリの家系と儀礼伝承

2.1 タントリの家系

タントリ職は通常、同じ家系により世襲されるが、時に他家へと譲られることがある。例えば、職務を継承できる男子が途絶して知り合いや弟子たちに職権を譲るケースや、多忙になったため遠方にある寺院の職務を他家に委ねるケースがしばしば見られる。こうして職権の分割委譲が繰り返されたことで、現代では、所轄寺院の多寡を問わなければ、タントリ職に従事している家自体は無数に存在する。

しかし、その中でも古くからタントリとして知られ、現在でも多数の寺院に職権を持つ、あるいは大寺院でタントリを務めている有力家系がある。ケーララにおけるタントラ伝統の概要を初めて紹介した Raman Nampūtiri [1945]（儀軌文献『タントラサムッチャヤ』刊本への序論）は、そうした有力なタントリとして、「表2」に挙げた24の家名を記している（pp. 80f.^{17）}。

このリストからは、有力タントリの地位がブラーマン階級の家々によって占有されている事実が窺える。ケーララ州のブラーマン社会では、ケーララ土着のブラーマンであるナンブーディリ（nampūtiri）が最上位に位置づけられている。そして、これに次ぐ形で、カルナータカに出自をもつポーティ（pōrri）など、かつてケーララ以外の地域から移住してきたといわれる様々なブラーマンが存在する。

またナンブーディリの内部では、ステータスの違いに応じて複数の称号が用いられている。ナンブーディリの中でも裕福な上位階層とされるアーディヤン（ādhyān）は、「ナンブーディリパード」（nampūtirippātū）という称号を持つ。その他はアースヤン（āsyān）という一般的階

表2 ケーララ州の有力タントリ家系

	家 名	カースト/ステータス	備 考
1	タラナネルール家	ナンブーディリパード	トラヴァンコール王室守護寺院であるパドマナーバスヴァーミ寺院のタントリ
2	マナリッカラ家	ポーティ	
3	クーッカラ家	ポーティ	
4	クラッカダ家	ポーティ	
5	ターラマン家	ポーティ	アイヤッパン神の聖地であるシャバリマラ・ダルマシャスター寺院のタントリ
6	クリッカート家	バッタティリ	
7	バラムプール家	バッタティリ	
8	カディヤッコール家	ナンブーディリ	
9	マナヤッタート家	ナンブーディリ	
10	プリヤンスール家	ナンブーディリ	トゥリプニトゥラ市プールナトライーシャ寺院のタントリ
11	イダパリ家	ナンブーディリ	
12	カイニッカラ家	ナンブーディリ	
13	ヴェムピリヤット家	ナンブーディリ	
14	クーターラッカート家	ナンブーディリ	
15	マタピリ家	ナンブーディリ	
16	クナット家	バッタティリ	
17	チェーナース家	ナンブーディリパード	グルヴァーユール市クリシュナ寺院のタントリ
18	カルール家	ナンブーディリパード	
19	カートゥマダス家	ナンブーディリ	
20	バームブメッキヤート家	ナンブーディリ	蛇神崇拝の儀礼で知られる家系
21	アンダラーディ家	ナンブーディリパード	
22	シュリーダランチェーダット家	ナンブーディリ	
23	カーンプラット家	ナンブーディリ	
24	ボダユール家	ナンブーディリパード	

層に属し、単に「ナンブーディリ」と称している¹⁸⁾。「バッタティリ」(bhattatiri)は特に学問に秀でた家の称号である。例えば、トリシュール県ムクダプラム郡にあるペルヴァナム・グラマム(グラマムについては後出「3.1」参照)には133のナンブーディリ家系が属しているが、そのうちアーディヤン家系は22で、残りはアースヤンである。また133家の中でバッタティリとされる家は八つ存在する¹⁹⁾。

さて、「表2」に挙げた24家のうち、ナンブーディリの家系は20に上っており、その社会的、宗教的権威が明瞭に映し出されている。ただし少数ではあるが、非ナンブーディリにも有力家系があり、その中にはターラマン家(「表2」の5)のようにケーララ屈指の聖地とされるシャバリマラ寺院を管轄している例があることは注目される。このことは、ケーララにおけるもう一つの大きな宗教伝統であるヴェーダ伝承が専らナンブーディリに占有されている事実と、興味深い対照をなしているといえよう。

2.2 儀礼伝承の実際

タントリが寺院で祭事を行う際、その執行方法は各寺院が個別に依拠している儀軌（祭事マニュアル）に準じる。つまり、同じ祭事であっても、出仕する寺院によってその挙行方法が異なる場合がある。ただし、ケーララ州においては、ほとんどの寺院が『タントラサムッチャヤ』（Tantrasamuccaya）およびその補遺である『シェーシャサムッチャヤ』（Śeśasamuccaya）を標準的な儀軌として採用しており、一部の例外的な寺院を除いては、祭事の式次第に大きな違いはないといわれる²⁰⁾。

『タントラサムッチャヤ』は、15世紀にチェーナース家（「表2」の17）出身の学匠ナーラーヤナン・ナンブーディリパードにより、旧来のタントラ伝承を統合する形で編纂されたものである。『シェーシャサムッチャヤ』はナーラーヤナンの息子シャンカランの作であり、『タントラサムッチャヤ』に収録されなかった寺院祭事および各種の宗教儀礼を記述している。両書でも扱われていない特殊な祭事・儀礼については、「アーガマ」と呼ばれる別種の儀軌類を用いて執行する。なお、『タントラサムッチャヤ』にはいくつもの注釈文献があり、その中でも19世紀にマラヤーラム語で書かれた『クリッカートパッチャ』（Kulikkāṭṭu pacca）（「表2」の6クリッカート家出身のマヘーシュヴァラン作）が、現在では特に広く使用されている。

ところで、『タントラサムッチャヤ』の流布によりケーララの儀礼伝承が平準化されてきた傍ら、その影響を排して、今に至るまで独自の儀礼伝承を保ち続ける寺院もある。例えば、旧トラヴァンコール王室の守護寺院として知られるパドマナーバスヴァーミ寺院（ティルヴァナ

表3 古儀軌『アヌシュターナ・パッダティ』に基づく儀礼を行う「パッダティ寺院」

	寺院名	所在地	備考
1	シュリーパドマナーバスヴァーミ寺院	ティルヴァナンタプラム市	トラヴァンコール王室の守護神寺院
2	ミトラナングプラム・マハーヴィシヌス寺院	ティルヴァナンタプラム市	
3	ヴァースデーヴァプラム寺院	ティルヴァナンタプラム市近郊	
4	クーダルマーニキャン寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ市	イリンニャーラクダ・グラーマムの守護神寺院。
5	バツタナープラム・シュリーパドマナーバスヴァーミ寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ市近郊ターンニシェーリ地区	表1の「17」と同じ
6	トリヴィクラマプラム寺院	トリシュール県イリンニャーラクダ市近郊	
7	ミトラナングプラム寺院	トリシュール県ムクダプラム郡プトウッカード地区	
8	ミトラナングプラム寺院	トリシュール県チャラクディ郡チェールプ地区	ベルヴァナム・グラーマムのヴェーダ朗唱合宿（三年ごと）の開催地
9	ヴァースデーヴァプラム寺院	トリシュール県チャーラクディ郡コダカラ地区	
10	チェーラーミットム・クリシュナ寺院	エラナークラム県ベルムパーヴェル市近郊チェーラーミットム地区	



写真3 パッタープラム・シュリーパドマナーバ
スヴァーミ寺院（「表3」の5）

ンタプラム市) や、トリシュール県イリンニャーラクダ市の中心寺院であるクーダルマーニキャン寺院では、『タントラサムツチャヤ』より古い『アヌシュターナパッダティ』(Anuṣṭhānapaddhati) という儀軌を採用している。同書は『パラシュラーマパッダティ』という別名をもっており、ケーララの建国神であるパラシュラーマンが、最古のタントリと伝えられるタラナネルール家（「表2」の1）に授けたものとされる。現在では、

「表3」に挙げる10寺院で、この『アヌシュターナパッダティ』に則った祭事が行われている。これらは「パッダティ寺院」(paddhatikṣētram) と呼ばれ、規模の面では必ずしも大きな寺院ばかりではないが、古くかつ格式の高い寺院と見なされている²¹⁾。

3. タントリ家系とヴェーダ伝承の関わり

上に述べてきた一般的なタントリの職務とそれをめぐる社会環境の変化などを踏まえ、本節では代表的な有力タントリであるタラナネルール家 (Taraṇanellūr mana) の事例を見ていく。同家は、ケーララ州で最も格式の高いタントリとして知られる一方で、ヴェーダ伝承の師匠家という側面も持っている。ヴェーダとタントラという、ケーララに固有の二つの宗教伝統において、ともに高い地位を占めている珍しいケースであるといえる。以下では、事例の理解に必要な範囲でヴェーダ伝承家系の概要を述べ、その上でタラナネルール家が二つの宗教的地位を兼ね備えることになった経緯を明らかにしたい。

3.1 ヴェーダ伝承の家系

インドの他地域ではすでに著しく衰亡しているヴェーダ伝承が、ケーララ州ではナンブーディリたちの間でよく保持されてきた。一つの祭火を用いて行う小規模な「グリヒヤ祭式」(家庭祭式) は今でもナンブーディリたちの生活に根付いている。さらには、インドの他州ではほとんど絶えた、三つの祭火を設置して行う大規模な「シュラウタ祭式」が、近代における断絶の危機を乗り越え、現在まで挙行され続けている。ナンブーディリ社会は、こうしたヴェーダ伝承をめぐる家同士の重層的な関係の上に成り立っている。そこでは各家が、特定のヴェーダの流派・法統に属するだけでなく、先祖の出身地を同じくする家々のつながりであるグラーム(祖村) と呼ばれる社会集団にも所属している。

つまり、どの家も原則として、ヴェーダ伝承の流派であるスートラム (sūtram, 例: バウダーヤナ), 血族の系統であるゴートラム (gotram, 例: アンギラサ), 師弟関係の法流であるプラヴァラム (pravaram, 例: パーラドヴァージャ), そしてグラーマム (grāmam, 例: イリンニャーラクダ) という四つの帰属先を持っていることになる²²⁾。



写真4 ヴェーダ祭式による結婚式（左手前の男性が導師）

[グラーマム]

このうち、ナンブーディリ社会の構成要素としては、グラーマムの意味合いが相対的に大きい²³⁾。というのも、ヴェーダ学習上の師弟関係は常にこのグラーマムの中で固定されており、ウパナヤナ（ヴェーダ学習への入門式）や結婚式などの重要な通過儀礼も、グラーマム内の師匠家から導師が招かれ、その指導のもとに執行されるからである。導師は同じスートラムに属する決まった師匠格の家に依頼することになっており、その家のメンバーが何らかの事情で来られない場合は、たとえスートラムが異なっても、同一グラーマムに属する別の師匠格の家に代役を依頼する。反対に、別のグラーマムにある同一スートラムの家に対して、そうした依頼をすることは基本的にない。こうしたことから伝統的には、スートラム等の繋がりに比べ、グラーマムの人間関係のほうが人々の生活により大きな影響を持ってきたと考えられる。

[ヴァイディカンとオーディカン]

ヴェーダ伝承の師匠家は、その職権の大小に応じてヴァイディカンとオーディカンという二種類に分かれる。ヴァイディカン (vaidikan, サンスクリット語 *vaidika*-) は、シュラウタとグリヒャ両祭式伝承の教授資格を持ち、ヴェーダ祭式の指導者として最高位にある。次に挙げるオーディカンの職権も包摂する。ヴァイディカンは、基本的に各グラーマムに二家ずつ存在する。オーディカン (ōtikkan, 地域によってオーイカン *ōykkān* あるいはオーイケンともいう) は、グリヒャ伝承の教授のみに資格を有する (cf. 藤井 2012: 276-279)。同じ語で師匠格の「家」を指す場合と、優れた知識を持つ先達を指す場合がある。ただし、オーディカン家系でない個人が、後者の意味でオーディカンと呼ばれることはあっても、その人の家自体がオーディカン家となるわけではない。オーディカン家の数に特段の制限はないが、ヴァイディカン家の縁戚家系がその地位にあるケースも散見される。

ちなみに、各グラーマムには原則として二つのヴァイディカン家があると述べたが、両者はそれぞれに固有の役割を与えられており、それに応じて異なった呼称をもつ。まず「ヤーガー



写真5 イリンニャーラクダのヴァイディカン「カイムック家」におけるヴェーダ祭式

ディカーラ・ヴァイディカン」(yāgādhikāra-vaidikan) は、シュラウタ祭式を指導するとともに、自らそれを執行する権利(ヤーガーディカーラム)を持っている。ただし、ヴェーダ聖典に記された祭式規定を、状況に応じて変更する権限は持っていない。一方の「ヴィディカルタ・ヴァイディカン」(vidhikarta-vaidikan) は、自ら祭主となってシュラウタ祭を行うことは出来ず、その正しい執行を監督する役割を担う。ただし、状況に応じて祭

式規定(ヴィディ)を変更する権限を有している。ちなみに、両者の差異はシュラウタ祭式においてだけ生じるものであり、グリヒヤ祭式については双方とも、執行の指導をし、かつ自らもそれを祭主となって行うことが出来る。

[オートウラとオーティラータ]

ところで、シュラウタ祭式に関わるヴェーダ伝承については、その学習を許される家と、許されていない家とがある(グリヒヤ祭式に関わる学習、および同祭式の挙行を禁止する例はないようである)。前者の家系は「オートウラ」(ōttulla)と呼ばれる。この語は、マラーヤラム語でヴェーダを意味するオートウ(ōttu)と「在ること、有すること」を意味するullaの合成語であり、同義語としてオートマール(ōttamar)がある。この家系の中に、毎朝夕に行うシュラウタ祭であるアグニホートラの執行を許される家系があり、これを特に「アグニホートラ・マナ」と呼んだ。かつては王がアグニホートラ・マナの認可を行い、高い格式を与えられたという。後者の家系は「オーティラータ」(ōtillāta)と呼ばれる。上述のオートウと「欠落」を意味するillātaの合成語である。これらの家系は、過去に罪や宗教上の禁忌を犯した者がいるなど、何らかの理由でシュラウタ祭式に関わる学習から排除されている。

このオートウラとオーティラータの区別は厳格なものであり、単にヴェーダ伝承上の資格が異なるだけでなく、両者の間では決して婚姻関係が持たれないなど、様々な社会的局面において両者の差は歴然としている(cf. Mencher & Goldberg 1967: 90, 藤井 2012: 279f.)。なお、かつてはオートウラの中でさえ、アグニホートラ・マナとそうでないマナの間では婚姻が避けられたという。

3.2 タラナネルール家を対象とする調査の概要

[タラナネルール家の特色]

Rāman Nampūtiri [1945: 80f.] が記す有力タントリ家系のリスト（前出「表2」）でも筆頭に挙げられていることから窺えるように、タラナネルール家はケララ全体でもひとときわ古く、格式の高いタントリ家系として知られている。ケララ、タミルナドゥの両州にわたって数多くのヒन्दゥ寺院におけるタントリを務めると同時に、旧トラヴァンコール王家の守護寺院であるバドマナーバスヴァーミ寺院のタントリとして権勢を維持してきた。かつては王権儀礼の執行を司ることから、「王の師」（ラージャグル）とも呼ばれたという。

その一方で、ヴェーダ伝承においても、タラナネルール家はイリンニャーラクダ・グラマムのヴァイディカンとして最高の家格を保持している。前述したように、各グラマムには二つのヴァイディカン家のあることが通例であるが、イリンニャーラクダでは例外的に三つのヴァイディカンが存在する。そのうちカIMUMツク、パンタルという二つの家はヤジュルヴェーダ系統のストラムであるパウダーヤナ派（Baudhāyana）に所属し、タラナネルール家のみがヤジュルヴェーダの別のストラムであるヴァードゥーラ派（Vādhūla / Vādhūlaka）に属している。こうした事情から、タラナネルール家の歴史を知ることは、有力タントリの生成過程を確認するとともに、タントラとヴェーダという二つの宗教伝統の関係性について重要な情報を得ることをも可能にしてくれる。

[調査地域および調査方法]

筆者は、2009年から2016年まで毎年、ケララ州中部における現地調査を続けている。主な調査地域は、前掲「図1」の下部に示したトリシュール県とその周辺である。後述するとおり、タラナネルール家系に属する諸分家は、同県南部ムクンダプラム郡の中心都市であるイリンニャーラクダ付近のターンニシェーリ地区とアングートゥ地区、そして沿海部であるチャーヴァカード郡南端のトリプラヤール地区に散在している。このうち、本調査における主な情報提供者は、ターンニシェーリに所在する「ネドゥムピリ・タラナネルール家」の人々である²⁴⁾。

これまでに同家を訪問した日数は30日あまりで、敷地内でヴェーダ文献の写本を撮影する傍ら男性メンバー、とくに家長であるブラディーブ・ナンブーディリパード氏、そして末弟（三男）のバドマナーバン・ナンブーディリパード氏への聞き取りを行った。聞き取った情報の要点については、常々ガイドとして同行してもらっているムッタットカート・マーマンヌ・ナーラーヤナン・ナンブーディリ氏にも重ねて尋ね、事実確認に努めた。同氏の親類で、もう一つの主な調査地であるパーンニャール村（タラピリ郡）に住む古老ムッタットカート・マーマンヌ・スブラフマニヤン・ナンブーディリ氏へのインタビューにおいても、ネドゥムピリ・タラナネルール家で得た情報を別の角度から見直す知見をしばしば得ることが出来た²⁵⁾。

タントリとしての実際の活動状況については、2009年2月22日にエラナークラム県チエーラーナール地区にあるヴァイディヤナータ寺院のナヴィーカラナム（神力更新祭）に同行取材した。なおこの際、同寺院運営委員会の許可を得て、普段はヒन्दゥー教徒以外立ち入りが禁じられている回廊の内側に入って調査を行うことが出来た（建物が新築された直後で、異教徒の立ち入り禁止が明示される前であったため認められたとのこと）。

3.3 タラナネルール家の歴史

タラナネルール家は現在、1. キダンガシェーリ (Kīṭāṅṅāśēri), 2. ネドゥムピリ (Neṭumpiḷli), 3. テッキニヤット (Tekkinyattū), 4. ヴェルテータット (Veḷuttēṭattū) という四つの家に分岐している²⁶⁾。1952年頃にテッキニヤット家から新たな分家がありチェムバーピリ (Cembāpiḷli) と称しているが、現段階での独立性は上の四家ほど明確ではないため、テッキニヤット家を含めて考えておく。これら四つの家はみな、個別の家名の後ろにタラナネルールの名を置き、元々一つの家であったことを明示している。後述するように、このうち「ネドゥムピリ」の名称は、タラナネルール家のメンバーが分岐・移住した先にかつて居住していた家（つまり元の地主）の名である。では、現在見られる同家の構成は、どのようにして成立したのであろうか。前節に述べた調査活動の中で得られた情報を整理すれば、同家の歴史をおおむね以下のように描くことができるだろう。

[タラナネルールの祖家]

分岐以前のタラナネルール家（ここでは「祖家」と呼んでおく）は、イリンニャーラクダ市近郊のターンニシェーリ地区 (Tānniśēri) に居住していた。祖家が建っていた地には、家の中庭に置かれていた「ムーラッカル・バガヴァティー」と呼ばれる神祠としての石座が残っている（「写真6」参照）。現在では、テッキニヤット家のメンバーが定期的に参詣し、香花や燈火を捧げているという。



写真6 タラナネルール祖家の遺構
（神祠としての石座）

旧トラヴァンコール王家の王女が刊行した Bayi [1995] は、未公開資料を数多く用いながら、王室守護寺院であるパドマナーバスヴァーミ寺院（ティルヴァナンタプラム市）の歴史を記述している。そこには、タントリとして同寺院に深く関わってきたタラナネルール家の情報も断片的に含まれている。例えば、ミトラナーナンダプラム寺院（ティルヴァナンタプラム市、前掲「表3」の2）が所蔵する西暦

1168年頃の銅板資料に、タラナネルール家の祭官の名が記されているという。またタミルナードゥ州カニヤクマール市近郊にあるシュチンドラム寺院の資料（Śucīndram Inscription）には、1238年の項に同寺院のタントリとしてタラナネルール家の名が見える Bayi [1995: 275]。これらの情報に従えば、同家は少なくとも12世紀までに有力寺院の祭官家系として一定の権勢を得ており、漸次にトラヴァンコール王室とも関係を深めていたものと推測される。

[テッキニヤット家の分岐]

この祖家から最初に分岐したのはテッキニヤット家であったようである。同家はイリンニャーラクダから西北に15キロほど離れたトリプラヤール（Tripprayār）に移住し、そこから後にヴェルテダット家が派生したという。両家は現在もトリプラヤール地区（現トリシュール県チャーヴァカード郡）に住んでいる。本稿では、両家の系統をまとめて「トリプラヤール系」と総称することにする。

なお、聞き取り調査によれば、テッキニヤット家の移住先にかつて住んでいた人々はヴェーダの学習を禁じられたオーティラータであったという。それゆえ、同じ敷地に住むことになったテッキニヤット・タラナネルール家とその分家も、ヴェーダ学習の資格という点ではオーティラータと見なされているようである。

このテッキニヤット家による現住地への移住がいつ行われたのかは明確ではない。ネドゥムピリ家で複数のメンバーに聞いたところでは、次に述べるヴァイディカン権の獲得の段階で、すでに祖家からテッキニヤット家が分かれていたということである。ただしその年代は曖昧である。先に触れた Bayi [1995: 276] は、タラナネルールに現在の四家体制が成立したのは17世紀後半、ウマー・アンマ・ラニ女王（1677年～1684年在位）の治世であったと推測している。この説をとるならば、ヴェルテダット家を派生させる前のテッキニヤット家は、15世紀半ば頃までにはトリプラヤールへの移住を済ませていたことになるだろう。

[アングートゥへの移住とヴァイディカン権の獲得]

ターンニシェーリの祖家に残った人々も、おそらくテッキニヤット家の分岐からさほど隔たらない時期に、イリンニャーラクダ市近郊にあるアングートゥ地区（Aññūtu）へと移住した。その経緯は次のように伝えられている。

タラナネルール家が属するヴァードゥーラ派には、かつてコーヴァート（Kōvāṭu）とポーナルール（Pōṅallūr）という二つのヴァイディカン家が存在した。そして通常のヴァイディカン制に違わず、前者は祭式執行権を持つヤーガーディカーラ・ヴァイディカン、後者は祭式規定の変更権を持つヴィディカルタ・ヴァイディカンとして、それぞれ役割を分掌していた。ところが、このうちコーヴァート家が断絶してしまい、同家が持っていたヤーガーディカーラ・

ヴァイディカンの権限を、弟子筋にあたるタラナネルール家が継承することになった。またそれにもない、タラナネルール家は祖家の土地を離れ、コーヴァート家のあったアングートウの敷地に移り住んだのである。

なお、コーヴァート家は他家との呪詛合戦によって断絶した、という言い伝えがある。コーヴァートは、ヴェーダ伝承のヴァイディカンであると同時にタントリであり、さらに「マントラヴァーディ」(mantravādi) と呼ばれる呪術師の家系でもあった²⁷⁾。同じマントラヴァーディの一つにカーヴァナート (Kāvanātū) という家があり、両者の間に争いが起こった。そして、互いに強力な呪詛を掛け合ったために、最後には相討ちとなって両家ともに断絶したという。なお、コーヴァートが保持していたタントリの職権は、一方のヴァイディカンであるポーナルール家と、同じイリンニャーラクダ・グラマムに属するアマルール家 (パウダーヤナ派) に移譲された。後者は、後にコーヴァートと敵対していたカーヴァナート家のマントラヴァーディ職を継いだ。それが現在のカーヴァナート・アマルール家 (「表1」の9と10参照) となっている。

いずれにしても、テッキニヤット家の分岐ののち、ターンニシェーリに残っていた人々がコーヴァートからヴァイディカン権を譲り受けたという話は、おそらく歴史的事実とさほど乖離していないと思われる。というのも、トリプラヤール系の二家は一貫して、有力タントリではあるが、ヴェーダのヴァイディカン権を持っていないからからである。これは、ヴァイディカン権獲得の時点で、すでにテッキニヤット家がトリプラヤールに移っており、いわゆる本家筋から離れていたためと想像される。また、テッキニヤットの移住先はオーティラータの土地であったから、その意味でもヴァイディカンにふさわしくなかったかもしれない。なお、仮にテッキニヤットの分岐を、タラナネルール家がヴァイディカンになった後と想定した場合、ヴァイディカンのメンバーがオーティラータの土地に移住することの不自然さが問題となる。

さて、コーヴァート家の断絶によるタラナネルール家へのヴァイディカン権移行の時期であるが、ネドゥムピリ家での聞き取りでは、400年前という説もあれば12～13世紀頃という説もあるなど、見解が一定しない。一方で、祖家の地からアングートウへの移住ののち約100年の間に、アングートウからネドゥムピリ家が分岐したという話がある。そうであれば、ネドゥムピリ・タラナネルール家の名はすでに16世紀初頭の文書に現れる (Bayi 1995: 275) というから、少なくとも15世紀かそれ以前の段階で、祖家からアングートウへの移住が行われたものと想像される。

[ネドゥムピリ家の分岐とキダンガシェーリ家の現住地入り]

祖家の土地と同じターンニシェーリの地区内に、ネドゥムピリという名の家があった (「旧ネドゥムピリ家」と呼んでおく)。血筋の上でタラナネルールと繋がりはなかったが、ヴェーダ伝

承上は同じヴァードゥーラ派に属していたという。タラナネルール家のアングートゥ移住から100年ほど経った頃（おそらく15世紀頃か）、この旧ネドゥムピリ家が断絶し、その土地にタラナネルール家の一部が移住した。現在のネドゥムピリ・タラナネルール家がそれである。また、同家がターンニシェーリに移住したのと同じ頃、アングートゥに残った人々も、それまで住んでいたコーヴァート家の跡地から、その北側に隣接する土地へ移った。これが現在のキダンガシェーリ・タラナネルール家である。

ここで注目されるのは、ヴァイディカンの権利とそれに付随する聖典写本の扱いである。アングートゥの地に残ったキダンガシェーリ家とともに、ターンニシェーリへ移ったネドゥムピリ家もヤーガーディカーラ・ヴァイディカンの権限を保持した。しかし、両家に伝わるヴェーダ聖典の写本類を見ると、とりわけ古く、かつ重要な内容を持つ写本（コーヴァートから受け継いだものか）は、前者の所蔵となっている傾向がみられる²⁸⁾。同じくヴァイディカンを称していても、ヴェーダ伝承の本流は、どちらかと言えばキダンガシェーリ家の側にあったのかもしれない。

[ヴェルテーダット家の分岐]

その後、トリプラヤール系のタラナネルール家では、テッキニヤット家からヴェルテーダット家が分岐した（「写真7」参照）。これにより、現行のタラナネルール四家が成立したことになる。先述したように、Bayi [1995: 276] は四家の成立を17世紀後半のことと想定しており、これに疑義を挟む特段の理由はない。本稿でも、この想定年代にならっておくこととする。

[ポーナルール家断絶とタラナネルール家への聖典写本の移譲]

コーヴァート家とならび、ヴァードゥーラ派のヴァイディカンとして権威ある存在であったポーナルール家が、1940年代に断絶した。男性のメンバーが相次いで病死し、家人に女性しか残らなかったという。この時、同家が持っていたヴィディカルタ・ヴァイディカンの権限は、他の特定の家へ移譲されることはなかったようである。ただし、所蔵されていた聖典写本類の多くは、キダンガシェーリおよびネドゥムピリの両家に移管された。さらに、このポーナルール家もタントリの職権を少なからず持っていたが、断絶後は前述のカーヴァナート・アーマルール家を含む複数のタントリ家系に譲られたようである。



写真7 ヴェルテーダット家の母屋
（二つある中庭の一つ）

[タラナネール家の現在]

四つのタラナネール家は現在、いずれも 150 ほどの所轄寺院をもつ有力タントリとして活動している。ただし、所轄地域にははっきりした傾向がある。テッキニヤット家はケーララ北部のマラバル地域、キダンガシェーリ家はケーララ中部、ヴェルテータット家はそのうちのトリシュール県辺り、そしてネドゥムピリ家はケーララ南部を含むケーララ州全土、およびタミルナドゥ州南部の寺院を管轄している。おそらくは移動効率も考慮しつつ、四家の中で権益がある程度均等になるよう工夫していることが窺われる。

なおここでは、四家の中でもネドゥムピリ家が、他の家々より広い範囲を管轄している点が注目される。おそらくは、同家がタントリとして他の家々より優位に立っていることが関係しているであろう。Bayi [1995: 275] によれば、17 世紀後半の時点でトラヴァンコール王室は、パドマナーバスヴァーミ寺院における「タントラの権限」(the right of Tantra) を、四家の中でもネドゥムピリ家だけに授けている。そして現在でも同家は、パドマナーバスヴァーミ寺院で主席タントリとしての地位を保障されている²⁹⁾。

他方で、ヴェーダ伝承の師匠家としてのタラナネール家は、もっぱら、ヴァードウーラ派の家々で行われるグリヒヤ祭式の導師として活動するに留まっている。ヴァイディカンとしての本来の職務であるシュラウタ祭式の指導を行う機会はほぼ皆無といってよい。ケーララでは近年、ソーマ祭やアティラートラ祭(アグニチャヤナ祭)など、20 世紀後半に衰亡の危機を迎えていた大規模なシュラウタ祭式が、再び盛んに行われている(藤井 2012: 287-294)。一時は祭式の知識を失いかけていたヴァイディカンたちも、必要に応じてそれを学びなおしながら、祭式の指導や監督にあたっている。しかしキダンガシェーリ、ネドゥムピリ両家は、おそらく一世紀以上にわたってシュラウタ祭式に関わる機会がなかった。そのため、シュラウタ関連の伝承は途絶しており、再びヴァイディカンとして活動する可能性は低いと思われる。

ここまで述べてきたタラナネール家の歴史を、かつて断絶した二つのヴァイディカン家に関する情報とともに示せば、おおむね次頁の「図 2」のようになる。

4. む す び

本稿では、タントリの職務やその基礎にある儀礼伝承の実際を紹介し、また彼らを取り巻く社会的状況の変化を述べた。その上で、事例研究として有力タントリ家系の歴史を詳しく辿ってきた。そこで得られた知見に基づき、ヴェーダとタントラが持つ関係性の一局面に光を当てることによって本稿の締めくくりとしたい。

ナンバーディリは伝統的に、他の下位カースト民との接触や接近を厳しく制限するなど、自らの浄性の確保を最も重視してきた。またその潔癖さは他カーストの人々に対してだけでなく、

ケーララ州のヒन्दウー寺院司祭・タントリ（手嶋）

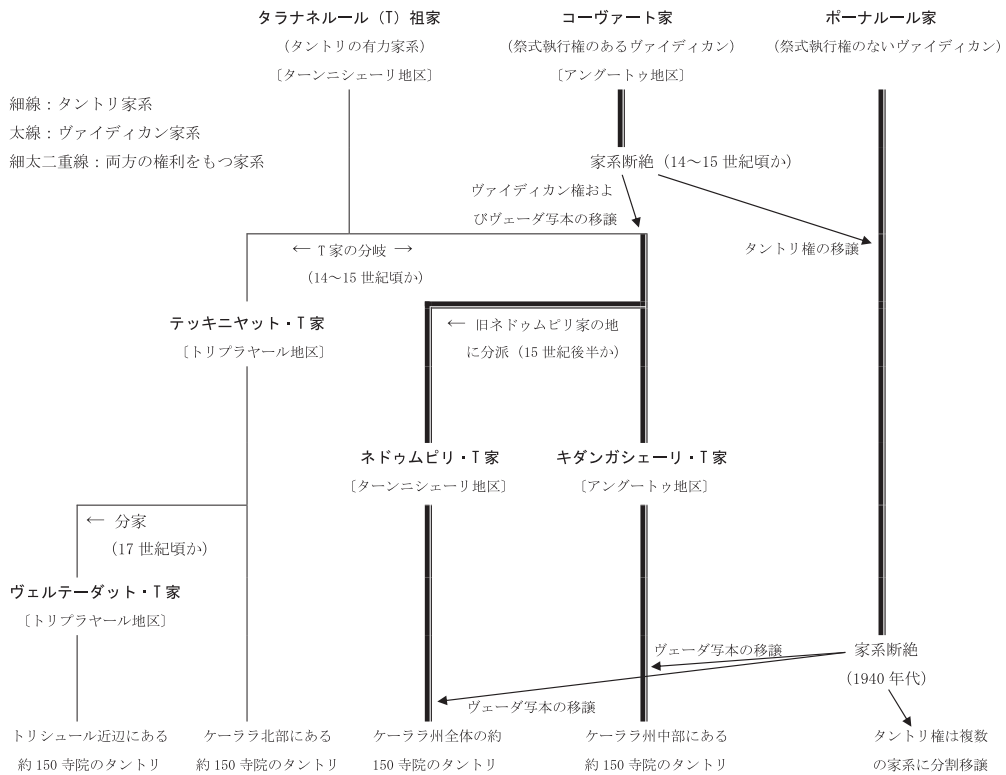


図2 タラナネルール家の分岐および他家からの宗教的権利等の移動

同じナンブーディリの人々の間でも常に意識され続けたものである。その結果、同じカースト内においてヴェーダの学習や朗唱、シュラウタ祭式執行の資格などを失った家系が少なからず生じた³⁰⁾。

しかし、本稿が取り上げた事例を見る限り、タントラの職権・ステータスは、原則としてそうしたヴェーダを基準とする家の位置づけに左右されない。例えば、トリプラヤール系のタラナネルール二家の状況を見ると、ヴァイディカンの立場からは除外され、オーティラータとしてシュラウタ祭式に関わる学習も禁じられているものの、そうした事情は、タントリとしての威信を低めることに繋がっていない。実際にトリプラヤール系の二家を訪ねてみると、両家とも他の二家に劣らない立派な伝統的家屋に住んでいる。ヴェルテータット家に至ってはトリシュール県内に五つほどしかないという、「エツトウゲットウ」(八つ組の家屋)³¹⁾と呼ばれる広大な家に暮らしている(上掲「写真7」参照)。そこに、ナンブーディリ社会の底辺にいたといった暗さは感じられない。

タントリは、ナンブーディリの間でも名誉ある職として認知されており、世襲制ではあるが、祭事に関する知識やスキルがあれば、その職権を譲られる可能性はどのナンブーディリにも開

かれています。また、タントリの権威には及ばないものの、タントラ儀礼（とくに寺院大祭）における専門職の地位が、ナンブーディリ社会で一定の評価を受けていることも注目される。先に「1.2」項で触れたとおり、寄宿学校「タントラ・ヴィディヤー・ピータム」の課程を修了し、サダスヤンなどの祭事専門職に就くことは、ナンブーディリの若者たちにとって自分自身、および出身家系の名誉を高めることにもなるという。

ヴェーダへの関わりを基準とする社会的位置づけは、ひとたびそれが確定すると、当事者にとって不本意なものであっても容易に変えることが出来ない。タントリを筆頭とする寺院大祭執行者の地位は、その職権の可動性によって、ヴェーダを基準とした階層システムの硬直性を補償する意味あいを持っているのではないだろうか³²⁾。

注

- 1) 本稿は、藤井正人（京都大学教授）と梶原三恵子（東京大学准教授）の両氏、および筆者の三人が、2009年2月からケーララ州で毎年行ってきた共同調査に基づく。本稿がもたらし得る成果は三人共有のものであることを明記しつつ、両氏にあらためて謝意を表したい。もちろん、本稿の内容等については筆者が責任を負っている。
- 2) 2011年インド国勢調査によれば、ケーララ州の人口33,406,061人のうち、ヒンドゥー教徒は18,282,492人であり、全体の54.7%となっている。次いでムスリムが8,873,472人（26.6%）、クリスチャンが6,141,269（18.4%）と続いている。ヒンドゥー教徒の割合は、全インドの79.8%、タミルナドゥ州の87.6%などと比べると低い傾向にある。Census data 2011: <http://www.census2011.co.in/census/state/kerala.html>（2016年8月25日閲覧）。
- 3) かつてナンブーディリの家では、男性メンバーのうち長男だけが同カーストの女性との婚姻を認められていた。一方、次三男以下はナーヤル女性とサンバンダムを結び、夜間から早朝にかけて自らナーヤルの家に趣くことがよく見られたという。この関係のもとに生まれた子はナーヤルの家族集団（タラヴァード）の成員となり、ナンブーディリ側に妻子に対する扶養義務が生じなかった。従って、ナンブーディリの側では常に長子のみが家の財産を相続し、結果として家産の分割による家の衰退が避けられた。他方のナーヤル側は、高位のナンブーディリとサンバンダムを結ぶことで、自らのステータスの向上と維持を図っていたという。Cf. Miller [1954: 413-415], Mencher [1966: 188f.], Mencher & Goldberg [1967: 89f.], 小林 [1992: 412f.], Parpola, M. [2000: 17f.]。
- 4) このほか、現代の地域社会でヒンドゥー寺院が果たす役割の変容を政治・経済的環境変化や諸カースト団体との関わりに着目して論じたものに小林 [2002, 2006, 2014] がある。そこでは、寺院の大祭にタントリが関与する事例が散見される。
- 5) タントリへの言及例としては、Narayanan & Veluthat [1983: 269], 小林 [2002: 74; 83f., 2006: 267-276; 280; 282; 313; 332; 337-339], Parpola, M. [2000: 149; 152] などがある。なお、川島 [1996: 416 (=07)] に見える、国家儀礼を司る「アーチャーリヤ」は、おそらくタントリが務めたであろう。
- 6) ケーララ州のヒンドゥー寺院に関する情報サイトとして、The Kerala Temples: <http://www.keralatemple.org/>

//www.thekeralatemple.com//（2016年8月25日閲覧）が参考になる。所在地や主神、行事のスケジュールなど、個別の寺院に関する多様な情報を入手することができる。

- 7) ナヴィーカラナムの中心祭事をジールナ・ウッダーラナ（Jirṇoddhāraṇa）という。後者を中心にナヴィーカラナムの概要を述べたものとして、Ajithan [2014: 121ff.] を参照のこと。
- 8) 寺院所有者についてはAjithan [2014: 360f.] を参照のこと。なお、寺院の「所有権」はウーラーンマ（ūrāṇma）あるいはウーラーイマ（ūrāyima）と呼ばれる（cf. Parpola, M. 2000: 88）。複数の寺院所有者が組んだ団体には、ウーラーラ・ヨーガム（ūrāla-yogaṃ）あるいはデーヴァスヴァム・ボード（dēvasvaṃ board）等の呼称がある（cf. Parpola, M. 2000: 90）。
- 9) ケーララ州における寺院開放の経過についてはParpola, M. [2000: 88], Ajithan [2014: 365f.] を参照のこと。
- 10) 分割相続法制化の経緯についてMencher [1966: 191-193] を参照のこと。また、ナンブーディリ社会における婚姻習慣の改革とその延長線上に生じた家産分割の流れについては粟屋 [1995: 152-157], ナーヤル社会における同様の経緯については小林 [2002: 67-69] が詳しい。
- 11) ケーララ州の土地改革と、それによる地主階級（ナンブーディリ、ナーヤル、寺院など）の土地喪失の経過についてはParpola, M. [2000: 93-99] を参照のこと。
- 12) ケーララ州政府の寺院管理局（Dēvasvaṃ Board / Devaswomboard）は、基本的にトラヴァンコール、コチ、マラバールの三管区に分かれて運営されている。以下にそれぞれの公式ウェブサイト URL を記しておく：
<http://travancoredevaswomboard.org/>（トラヴァンコール）
<http://www.cochindevaswomboard.org/>（コチ）
<http://www.malabardevaswom.kerala.gov.in/>（マラバール）。
- 13) Cf. Parpola, M. [2000: 88-90]。なお、前近代における寺院運営組織についてはNarayanan & Veluthat [1983: 260f.; 270] を参照のこと。
- 14) 寺院が各種カースト団体の管理下に移行していく具体的経緯については、小林 [2002: 75-95], および小林 [2006: 267-276] の「表1」に見られる諸事例を参照のこと。
- 15) タントラ・ヴィディヤー・ピータムは、ヒンドゥー主義団体であるRSS（Rāṣṭriya Svayamsevaka Saṃgha, 民族奉仕団）の活動家であったマーダヴジとカルプラ・ディヴァーカーン・ナンブーディリの二人によって設立された。本学校の政治的背景については小林 [2002: 95f.] を参照のこと。また、Namboothiri Websites Trust の中に本学校の説明サイトがある：
<http://www.namboothiri.com/articles/thanthravidyaapeettham.htm>（2016年8月25日閲覧）。
- 16) 筆者が2010年3月7日に訪問したカッレリ家（トリシュール県ムクンダブラム郡イリンニャーラクダ市近郊マナルール地区）での聞き取りによれば、同家がかつて50ほどの寺院でタントリの地位にあった。しかし1936年のトラヴァンコール寺院開放令以降、全カーストが境内に入ってくることを忌避して、同家は多くのタントリ職権を放棄したという。現在では、トリシュール県内にある七つの寺院でタントリを務めるのみである。
- 17) Ajithan [2014: 146-156] は、Rāman Nampūtiri [1945] の要点をコンパクトにまとめており便利である。24の有力タントリ家系は、Ajithan [2014: 177, n. 8] でも紹介されている。
- 18) ナンブーディリ・カースト内における諸種のステータスについてはMencher & Goldberg [1967: 90], Parpola, M. [2000: 150], および藤井 [2012: 279f.] を参照のこと。
- 19) ペルヴァナムでは同グラーマムに属する全家系について、家名、ヴェーダ伝承の流派などに加え、全構成員の名前や年齢、血液型などを含む詳細な人名録を作成している。本稿の記述はこの

人名録の情報による。

- 20) Ajithan [2014: 181-236] では『タントラサムッチャヤ』とその注釈を含むケーララ土着の儀軌類を数多く紹介している。これらの成立史について Sarma [2009] も参照のこと。
- 21) Ajithan [2014: 328-331] では、イリンニャーラクダ・グラームムの祭事・儀礼が『タントラサムッチャヤ』と別系統のものであることに注目している。ただし本稿で述べた『アヌシュターナパッダティ』(同名称の別文献があることに注意)と、それに依拠するパッダティ寺院の存在には言及していない。
- 22) これらナンブーディリ家系の帰属先のうち、ゴートラムは結婚相手探しの際に互いに尋ね合うという (Mencher & Goldberg 1967: 104, n. 5)。
- 23) グラームムについては Mencher [1966: 185f.], Parpola, M. [2000: 147f.], および藤井 [2012: 276f.] を参照のこと。現存する諸グラームム、およびそれらに所属する家系については、Namboothiri Websites Trust に網羅的な説明がある: <http://www.namboothiri.com/> (2016年8月25日閲覧)。
- 24) ネドゥムピリ家以外の三つのタラナネルール家系には2010年3月4日に訪問取材を行った。
- 25) ムットットカート・マーマンヌ家の両氏は、Parpola, M. [2000] の現地調査でも重要なインフォーマントとして寄与した人物である。
- 26) タラナネルール四家を筆頭とする現在のヴァードゥーラ派家系については、Parpola, A. [1984: 435-444] に詳しく報告されている。ただし同論文では、本稿で紹介する断絶したヴァイディカン家系には特に触れられていない。
- 27) ケーララにおける呪術(マントラヴァーダム)については、Namboothiri Websites Trust の中に説明ページがある: <http://www.namboothiri.com/articles/manthravaadam.htm> (2016年8月25日閲覧)。
- 28) タラナネルールのヴァイディカン二家が所蔵するヴェーダ文献関連写本、とくにシュラウタ祭式の綱要書である『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』諸異本の関係等については Ikari [1998: 6-11] を参照のこと。それによれば、キダンガシェーリ家が所蔵する写本のみがシュラウターストラの全部分を完備している一方で、ネドゥムピリ家の諸写本はみな中間部分までで終わっている。
- 29) 川島 [1996] によれば、トラヴァンコール王によるパドマナーバスヴァーミ寺院での国家儀礼は、18世紀に同寺院の大改修を行ったマールターンダ・ヴァルマ王(1729年~1758年在位)によって創始されたという。この過程においては、ネドゥムピリ家をはじめとするタラナネルール家も儀礼の首席司祭として、おそらく何らかの形で関与したことが推測される。
- 30) たとえばベルヴァナム・グラームムに属する133家のうち、祭式執行資格のない家は85ある(注19)に挙げた資料による)。またウェブサイト Namboothiri Websites Trust によれば、シユカプラム・グラームムの所属として挙げられる369家のうち、ヴェーダ朗唱資格のない家は22、祭式執行資格のない家は209に上る: <http://www.namboothiri.com/articles/sukapuram-graamam.htm> (2016年8月25日閲覧)。
- 31) ケーララの標準的な伝統家屋は「ナルゲットゥ」(四つ組の家屋)とよばれ、四角形の中庭の四方を建物を取り囲む構造になっている。「エットゥゲットゥ」は、その標準家屋を二連なりにしたものであり、中庭も家の内部に二つある。
- 32) ちなみに、コーヴァート家の断絶後になぜタラナネルール家がヴァイディカン権を獲得しえたかは不明であるが、当時すでに同家が確立していたであろうタントリとしての権勢が、そこで影

響力を持った可能性はある。もしそうだとすれば、稀なケースではあるが、タントラの領域における権威がヴェーダの領域における家のステータスを高めることに繋がった例ということになる。

参考文献

- 栗屋利江 [1995] 「ナンブーディリ・バラモンのカースト改革運動を考える」『東洋文化研究所紀要』128: 141-178.
- 川島耕司 [1996] 「19世紀インド・トラヴァンコールにおけるヒンドゥー王権と国家儀礼」『東洋学報』77-3&4: 422-400 (=1-23).
- 小林 勝 [1992] 「ケーララ社会とブラーフマン —— 統一王権の不在状況下におけるカースト制について ——」『民族学研究』54-6: 407-425
- [2002] 「地域社会における寺院の変質とヒンドゥー・アイデンティティへの試論：ケーララ州南部での調査から」関根康正編『南アドヤー地域における経済自由化と「宗教空間」の変容に関する人類学的研究：生活宗教に探る「宗教対立」解消の方途』平成11年度～13年度科学研究費補助金〔基盤研究（A）（2）課題番号：11691062〕（研究代表者・関根康正）研究成果報告書, pp. 62-100.
- [2006] 「文明化としてのキリスト教的制度性への改宗：インド・ケーララ地方におけるヒンドゥー教の再編成をめぐる」杉本良男編『キリスト教と文明化の人類学的研究』国立民族学博物館調査報告 62: 253-351.
- [2014] 「教会を模倣するカースト，カーストに囲い込まれたヒンドゥー：インド・ケーララ地方におけるキリスト教的文明化作用の結節点」杉本良男編『キリスト教文明とナショナルイズム —— 人類学的比較研究 ——』国立民族学博物館論集2 風響社, pp. 315-349.
- 藤井正人 [2012] 「ヴェーダの復興 —— 南インド・ケーララ州における古代と現代の接触 ——」田中雅一・小池郁子編『コンタクト・ゾーンの人文学 第三巻 —— Religious Practices/宗教実践 ——』晃陽書房, pp. 270-302.
- Ajithan, P. I. [2014] *The Ritualistic Tradition of Tantra in Kerala: A Study on Its Characteristic Features and Transmission*. Thesis submitted in partial fulfillment of the requirements for the award of the Degree of Doctor of Philosophy at Department of Sanskrit Sahitya, Faculty of Sanskrit Literature, Sree Sankaracharya University of Sanskrit, Kalady. (<http://shodhganga.inflibnet.ac.in/handle/10603/43551>)
- Bayi, Aswathi Thirunal Gouri Lakshmi [1995] *Sree Padmanabha Swamy Temple*. Bombay: Bharatiya Vidya Bhavan.
- Ikari, Yasuke. [1998] "A Survey of the New Manuscripts of the Vādhūla School —MSS. of K_1 and K_4 —." *ZINBUN* 33: 1-30.
- Narayanan, M. G. S. & Veluthat Kesavan [1975] "A History of the Nambudiri Community of Kerala" In Frits Staal (ed.) *Agni: The Vedic Ritual of the Fire Altar*. Vol. II, Berkeley: Asian Humanities Press, pp. 256-278.
- Mencher, Joan P. [1966] "Namboodiri Brahmins: An Analysis of a Traditional Elite in Kerala." *Journal of Asian and African Studies* 1-3: 183-196.
- Mencher, Joan P. & Goldberg, Helen [1967] "Kinship and Marriage Regulations among the

- Namboodiri Brahmans of Kerala." *Man n. s.* 2-1 : 87-106.
- Miller, Eric J. [1954] "Caste and Territory in Marabar." *American Anthropologist* 56-3 : 410-420.
- Parpola, Asko [1984] "On the Jaiminiya and Vādhūla Traditions of South India and the Pāṇḍu/Pāṇḍava Problem." *Studia Orientalia* 55 : 429-468 (3-42). Helsinki : The Finnish Oriental Society.
- Parpola, Marjatta [2000] *Kerala Brahmins in Transition : A Study of a Nampūtiri Family*. (Studia Orientalia 91) Helsinki : The Finnish Oriental Society.
- Rāman Nampūtiri, E. V. [1945] (ed.) *Tantrasamuccaya*. Trivandrum : Oriental Research Institute and Manuscript Library.
- Sarma, S. A. S. [2009] "The Eclectic Paddhatis of Kerala." *Indologica Taurinensia* 35 : 319-339.

要 旨

本稿では、ケーララ州のヒンドゥー教が持つ諸特徴のうち、とくに「タントリ」と呼ばれる高位の司祭を取りあげる。ケーララ州の寺院儀礼、とりわけ各種の大祭を執行するためにはタントリの参画が不可欠とされている。その存在はケーララ独自の宗教文化を形成する重要なファクターの一つと見てよいが、これに焦点を当てた研究は今までほとんど公にされていない。第1章では、寺院組織の概要を示し、その活動全体において担うタントリの職務、およびそれをめぐる社会環境の変化を述べる。第2章ではタントリの家系と、彼らが依って立つ儀礼伝承の在り方を紹介する。

その上で第3章では、有力なタントリの一つであるタラナネルール家（Taraṇanellūr mana）の事例を見ていく。同家は、ケーララ州で最も格式の高いタントリとして知られる一方で、ヴェーダ伝承の師匠家という側面も持っている。ヴェーダとタントラという、ケーララに固有の二つの宗教伝統において、ともに高い地位を占めている珍しいケースであるといえる。あらかじめ、事例の理解に必要な範囲でヴェーダ伝承家系の概要を述べ、その上でタラナネルール家が二つの宗教的地位を兼ね備えることになった経緯を明らかにしていく。

これらの検討を経て、最終的には以下の見解を提示する。ヴェーダ伝承上の職権やステータスはナンブーディリ社会における重要なファクターである。しかし、タントラの職権・ステータスは、原則としてそれに左右されない点が注目される。ヴェーダを尺度とする社会的な位置づけは、一度それが確定すると、当事者にとって不本意なものであっても容易に変えることは出来ない。しかし寺院のタントリは、ナンブーディリの間でも名誉ある職として認知されており、かつそれを得る可能性はどのナンブーディリに対しても開かれている。つまり、ナンブーディリ社会では、ヴェーダを軸とする硬直的な階層システムとは別に、より柔軟で可動的な階層システムがタントラの領域で担保されていると見ることもできよう。

キーワード：タントラ、ヒンドゥー教、ケーララ州、寺院、ブラーマン、ナンブーディリ、ヴェーダ

Abstract

This study deals with the social presence of the “tantris,” high-class priests peculiar to Kerala in South India. Every ritual held at Hindu temple requires the presence of a tantrtri, considering him as the sole person able to energize the divine idol. Though the tantris played an important role in the development of particular religious culture in Kerala, very little attention has been given to them in the past.

The first section shows an outline of the temple organization, the tantris' duties, as well as the social circumstance surrounding them in modern times. The second section deals with the important tantrtri families along with their ritual duties. In the third section, you will see a case study in which the history of Taraṇanellūr family is illustrated. Taraṇanellūr is one of the most famous tantrtri families and also an authority of the vedic tradition. This study will provide a clue to understanding the relationship between the vedic and tantrtric traditions, both of which are an essential part of the Keralan religious culture.

Keywords : Tantra, Hindu, Kerala, Temple, Brahmin, Nampūtiri, Veda